



寺紋
ひいらぎ
格 かこみ沢瀉
おもだか
(通称 大関沢瀉)

大雄寺報

= 第 7 号 =

平成 20 年 1 月 1 日発行

発行所 黒羽山 大雄寺

〒324-0233

栃木県大田原市黒羽町 450

TEL 0287-54-0332

FAX 0287-54-0330

編集発行人: 住職 倉澤 良裕

印 刷 所: タキザワ印刷

— 江戸時代前期に中国明から渡來した黄檗僧の扁額 —



こうせん
高泉筆 (1633~1695)

山門に掲げる扁額

仏国高泉と記すことから延宝6年(1678)
から元禄5年(1692)頃。



もくあん
木庵筆 (1611~1684)

本堂正面に掲げる扁額



もくあん
木庵筆 (1611~1684)

禅堂入口に掲げる扁額



文化財調査の経過報告



文化財調査 平成19年8月15日

れなかった。(本来保存修理を実施した後実績報告書を作成提出しなければならない)

大雄寺の建造物は、焼失することなく創建以来大きな改造もなく、今日まで維持されてきたことはたいへん貴重な文化遺産であり、また、禅宗寺院として基本的伽藍配置を守り、小藩の菩提寺としての寺院価値も非常に高いのである。

江戸時代においては黒羽藩主大関氏の檀那寺として維持され、現在は檀信徒の菩提寺として守られながら栃木県文化財として保存している。これら現存する建造物を国重要文化財として保存されることを望むものである。

昭和五十三年の調査報告で明らかにされていない点も多くあり、大雄寺文化財特別調査を実施し、大雄寺所蔵の古文書解読や建造物の詳細図面の作成などを進め平成十九年度末までに報告書を作成していきたい。

なお、この調査の実施については、文化庁、栃木県、大田原市それぞれが了承し、文化庁に報告書を提出する段階には大田原市も関与する旨の承諾を得ている。

◆ 平成十八年十月二十四日
〔栃木県文化財指定大雄寺建築物（本堂、禅堂、庫裡、総門、廻廊、鐘楼、御靈屋、経蔵）の国重要文化財指定に伴う調査実施の要望について〕

大雄寺住職、総代 高梨義彦氏、総代野田征行氏 要望書を大田原市教育委員会 雲井 課長に渡す。

◆ 平成十九年四月二十日
〔大田原市長と懇談〕
大雄寺から顧問 佐藤貢、総代 高梨義彦、住職 倉澤良裕、

また、昭和四十二年から平成三年までの二十五年間、本堂、庫裡、禅堂、総門、廻廊、鐘楼、経蔵などの建造物の保存修理事業の実績報告書も作成さ

千保市長、生涯学習課長 雲井氏
大雄寺の概要説明、国重要文化財指定への要望を伝え、市長として誠意を持った対応すると答える。市文化財係より住職からも県文化財課へ連絡すること。

◆ 平成十八年十一月八日
大雄寺を訪問 「栃木県による建造物観察」

栃木県より 岩渕課長補佐、栗田主任 大田原市より 八木沢係長・係員二名 大雄寺より 顧問 佐藤貢、須藤新一郎、総代 高梨義彦、野田征行、大野守、磯正衛

◆ 平成十八年十一月十四日
〔要望書提出〕

◆ 平成十九年五月二十九日
〔文化庁による観察〕

以上確認する。

◆ 平成十九年五月二十九日
〔文化庁による観察〕

文化庁文化財調査官 武内正和先生、栃木県文化財保護課 岩渕一夫氏・栗田裕敏氏、大田原市教育委員会文化財

「調査委員会による観察」
筑波大学の大和智教授、設計士 若林征示氏予備調査に訪れる。

・大雄寺伽藍の全ての保存修理事業の書類、図面、写真
立会に住職と総代 野田征行氏が同席。
調査した内容

・古文書、住持過去帳、大関藩主過去帳、曹洞宗文化財調査報告書

係 八木沢氏 外一名、若林征示 設
計士、大雄寺住職、顧問 佐藤貢氏・
総代 高梨義彦氏・大野守氏・磯正衛
氏出席 建造物（本堂・庫裡・禅堂・廻廊・總
門・經藏）を調査。部分的に写真を撮
る。

保存修理を実施してきた報告と昭和五
十三年以降で発見された資料をもとに
大雄寺特別調査報告書を作成し報告し
たいと伝える。栃木県、大田原市と連
絡を取りながら進めていく。年内をめ
どにしたい。

県立博物館の船木明夫氏が六月七日か
ら古文書調査を開始する。
六月初めに若林 設計士の後輩武藤氏
に大雄寺の図面を作成してもらい、七
月初旬に大和教授の学生による調査の
参考にしてもらうように、若林 設計
士から取り計らってもらう。

◆ 平成十九年七月二十六日

「大田原教育長と懇談」

大田原市教育委員会 小沼 教育長、

吉田 教育次長と面会。

生涯学習課 雲井課長、八木沢 係長、

那須土木社長 玉木茂氏が同席

今進めている総合調査を進めて報告書
の作成段階になつたら大田原市に知ら
せて欲しいとのこと。大田原市として
対処したいと回答。

◆ 平成十九年八月十四日

調査開始

工学院大学の後藤治 教授ほか学生三
名、筑波大学の大和智 教授ほか学生

八名計十二名調査に来山。建造物の調
査開始。

会場は月光館で行う。大雄寺所蔵の資
料はパソコンにデータを入力し写真撮
影する。

本堂、禅堂、庫裡、廻廊、鐘楼、經藏
をグループに分かれて調査を開始。

◆ 平成十九年八月十五日

調査

『庫裡、廻廊、鐘樓、総門保存修理計
画書を大田原市教育委員会へ提出。』

◆ 平成十九年八月十六日

調査と古文書からの調査。

古文書関係の船木先生と大和先生と住
職で検討協議。建造物の築年推測作業。
調査

◆ 平成十九年八月十七日

調査

平成十九年八月十八日
調査、午後三時終了。

◆ 平成十九年八月十八日

調査

古文書関係の船木先生と大和先生と住
職で検討協議。建造物の築年推測作業。
調査

◆ 平成十九年八月十七日

調査

古文書関係の船木先生と大和先生と住
職で検討協議。建造物の築年推測作業。
調査



文化財調査 平成19年8月15日

黄檗僧と大雄寺

曹洞宗（そうとうしゅう）は、道元
が、鎌倉時代に中国宋に渡り、天童山
で曹洞宗の如淨禪師に師事し、一二三
六年に帰国し、永平寺を開かれました。
「只管打坐」を重んじ、坐禅修行の姿
そのものが仏・悟りであると説き、修

大雄寺は禅宗の中の曹洞宗の寺院で
す。曹洞宗、臨済宗、黄檗宗が日本で
の禅宗です。
仏法は、お釈迦さまの教えを直接に
受け継いだ摩訶迦葉尊者から二十八代
目の菩提達磨を得てインドから中国へ、
そして日本へと伝えられました。

禅宗の中の臨済宗（りんざいしゅう）
は、中国宋の時代に中国へ渡り学んだ
榮西によって、鎌倉時代に日本に伝え
られました。臨済宗は時の武家政権に
支持され、政治・文化に重んじられま
した。臨済宗の坐禅は、「公案禪・看
話禪」ともいい、禪問答をして公案
(優れた禪者の言葉・悟りへ導く課題)
と一体になるように工夫し、坐禅を組
むものです。

曹洞宗（そうとうしゅう）は、道元
が、鎌倉時代に中国宋に渡り、天童山
で曹洞宗の如淨禪師に師事し、一二三
六年に帰国し、永平寺を開かれました。
「只管打坐」を重んじ、坐禅修行の姿
そのものが仏・悟りであると説き、修

修行することが仏の行であると説き、
道元自身は自らの教えを「正伝の仏法」
であるとして、曹洞宗は地方豪族や一
般民衆に広まりました。

黄檗宗（おうばくしゅう）は、中国
の僧が日本に渡つて広まった宗派です。
臨済宗、曹洞宗が日本風に姿を変えた
が、黄檗宗は明朝風様式を伝えていま
す。本山は隱元が開いた京都府宇治市
の黄檗山万福寺（おうばくさん まん
ぶくじ）であります。

同じ禅宗の臨済宗、曹洞宗がいすれ
も鎌倉時代の初期に伝來したのに対し、
隱元来日の江戸時代の初期であります。
黄檗山万福寺の住持も第十三世までは
すべて中国僧であり、仏像や建築、修
行生活も中国様式であります。

隱元禪師の後、第二世となつた木庵
性瑠（もくあんしゅうとう）が、禪僧
のしたがうべき規則である清規（しん
ぎ）を確立し、江戸白金に瑞聖（ずい
しよう）寺をひらいて関東の拠点とし
ました。木庵の後繼者鉄眼道光は、一
六七八年（延宝六）に黄檗版「大藏經」
を完成し、その板木は現在も宇治万福

《県立博物館 研究員 舟木明夫先生
による古文書調査》

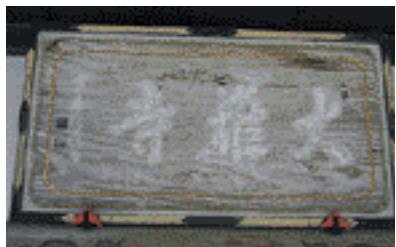
六月七日 第一回古文書調査
六月二十七日 第二回古文書調査
七月十一日 第三回古文書調査

八月一日 第四回古文書調査
八月十六日 調査の打合せ
八月三十一日 第五回古文書調査
十一月二十五日 第六回古文書調査
十二月五日 第七回古文書調査

寺にのこっています。また、第五世高泉性澈（こうせんしょうとん）は万福寺の伽藍整備にあたり中興となりました。

黄檗宗の坐禅は、臨済宗の禅に明代の念佛禪をくわえ、読経は唐音、儀式などの決まりは明朝風であります。隠元、木庵、即非如（そくひによいち）の三人は黄檗三筆として知られています。

ところで、大雄寺には黄檗宗の僧の扁額や書画、黄檗関係書籍などが多く保存しています。これらの史料から江戸初期の大雄寺住職について、また、黒羽藩主大関氏と関わる黄檗僧について、調べてみたが、なおも引き続き研究し解明していきたい。



扁 銀



扁 銀

木庵禪師について

本堂正面の扁額「大雄寺」は黄檗山万福寺二世木庵性瑫（もくあんしょうとう）筆であり、また禅堂に掲げる「選佛場」、玄関入り口の聯も木庵性瑫の書であります。

江戸時代前期に中国明から渡来した黄檗宗の僧。隠元に招かれて明暦元年（一六五五）四十五歳の時に来日、万治三年（一六六〇）摂津普門寺の隠元会下で万福寺の造営を助け、寛文四年（一六六四）九月には黄檗山万福寺に入り、二世を継ぐ。寛文一年（一六七一）江戸瑞聖寺入寺。將軍徳川家綱等の帰依によって万福寺の増築整備につとめた。延宝八年（一六八〇）万福寺三世慧林性機に譲り、山内の紫雲院に退隠す。「木庵禪師語録」三十巻、「紫雲止草」等を刊行。

貞享元年（一六八四）一月二十日示寂 七十四歳。

木庵性瑫（もくあんしょうとう）（一六一一～一六八四）貞享元年一月二十日示寂 七十四歳



紫雲止草 (大雄寺 藏)



聯

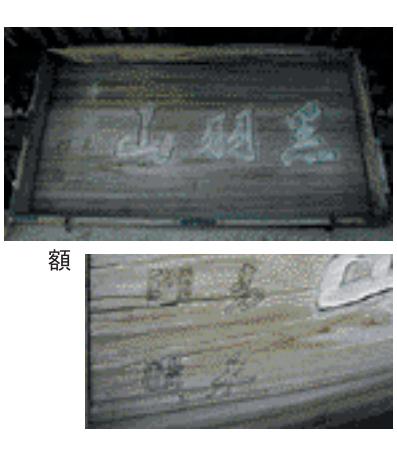
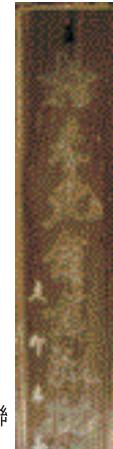
高泉禪師について

山道中程に建つ山門の扁額「黒羽山」は、黄檗山万福寺五世の高泉性澈（こうせんしょうとん）筆で、また本堂正面の左右の聯、丸柱に掛かる聯も高泉性澈の書であります。

東渡初祖伝
(大雄寺 藏)



高泉和尚事後事実 (大雄寺 藏)



高泉性澈（こうせんしょうとん）（一六三三～一六九五）元禄八年十月十六日示寂 六十三歳



扶桑禪林僧宝伝 (大雄寺 藏)

延宝三年（一六七五）「東渡初祖伝」二巻を刊行。延宝六年（一六七八）伏見の仏国寺を開山、元禄五年（一六九二）黄檗山万福寺五世を嗣ぐ。元禄八年（一六九五）徳川綱吉に謁見。千呆性安を万福寺六世に繼承す。元禄八年（一六九五）十月十六日示寂 六十三歳。

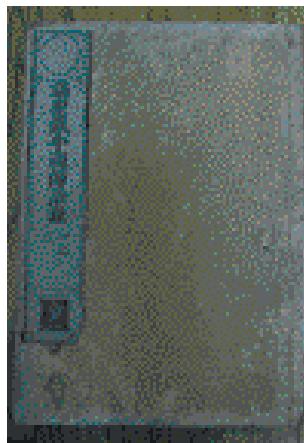
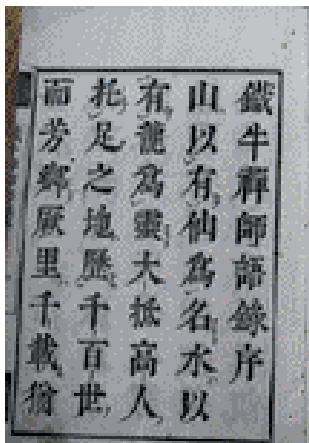
禅堂入り口に掲げる「止静」・「放參」の单牌は、鐵牛道機（てつぎゅうどうき）の書であり、鐵牛禪師語録二巻、大関増栄より寄進された鐵牛禪師の肖像図も保存しています。

また、鐵牛道機の靈骨、歯、爪が納められた青銅の壺に「當寺開山上鉄下牛機大和尚 元禄十三庚辰秋八月廿日示寂送之收心印禪院」とあります。

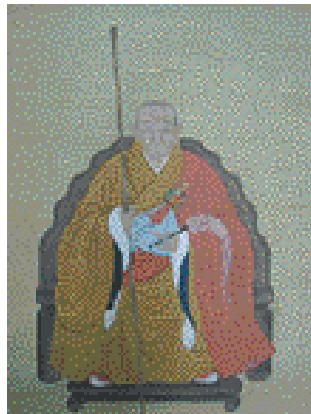


遺髪・爪（大雄寺 藏）

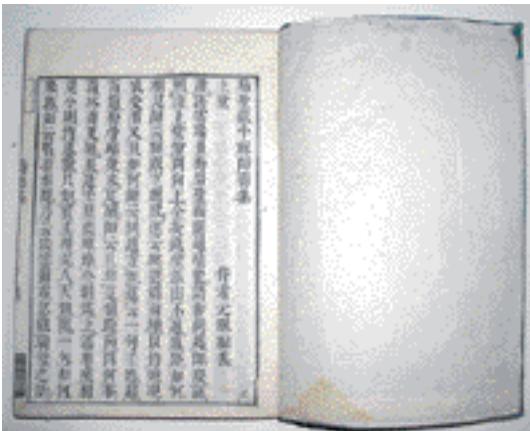
鉄牛禪師について



語録（大雄寺 藏）



頂相（大雄寺 藏）



鉄牛禪師寿章（大雄寺 藏）



墨書（大雄寺 藏）



单牌（止静・参放）

江戸時代前期の黄檗宗の禪僧。号は自牧子。諡号は大慈普応国師。長門国の生まれ。因幡国龍峯寺（鳥取県鳥取市）で修行後、長崎に滞在していた隱元隆琦（いんげんりゅうき）に参禅し万福寺創建に従事した。ついで隱元の高弟木庵性瑫（もくあんじょうとう）に師事して鐵牛道機と名を改め、その法を継いだ。黄檗山万福寺の造営に尽くし、京都洛西葉室淨住寺を中興、相模国小田原紹太寺、延宝元年（一六七三）江戸弘福寺を開山。延宝三年（一六七五）江戸瑞聖寺二世嗣ぐ四十八歳。天和三年（一六八三）鉄牛語録刊行。下総国匝瑳郡の椿海の千拓などの社会事業にも力を入れた。その後、人々に乞われて椿海跡地近くに福聚寺（千葉県東庄町）を建ててそこで没した。

元禄十三年（一七〇〇）八月二十日示寂 七十三歳

坐禅会活動

水戸祇園寺研修旅行に

参加して

鈴木 勝利

今からさかのぼること三百有余年、時は元禄時代、水戸祇園寺にゆかりのある和尚（心越禪師）が那須温泉の帰りに、当時も今と変わらない杉木立に



旅 行 研 修 祇 園 寺

囮まれた山道を登り大雄寺を訪れたそうです。その史実は、心越禪師の直筆が大雄寺の総門と禅堂に「靈鷲」と「学無為」篆書額となつて掲げられています。このような歴史的な関係と両寺が共に曹洞宗ということもあり、大雄寺日曜坐禅の友の会である「雄禪会」の研修旅行として倉澤ご住職を含め総勢十二名で、十月七日（日）の午後、水戸祇園寺を訪ねました。

正門には曹洞宗の開祖道元禪師が言われたといふ「寶藏自開」が刻印され、境内には樹齢百八年のドウダンツツジや様々な樹木が美しく調和し、当時のさわやかな秋晴れの中で、水戸の市街地の一角とは思えないほど静かに祇園寺は佇んでいました。

午後一時過ぎに到着後、ご挨拶、そして、江戸時代元禄期の頃の祇園寺の秘蔵の宝物の一部、掛け軸をご披露いただきながら、両ご住職を中心に行時を尋ねる内容のある交流研修会が開催されました。

囮まれた山道を登り大雄寺を訪れたそ

同坐禅、本堂で正面左右に分かれて坐し、般若心經読経の後、坐禅が開始されました。私事になりますが、いつもの早朝坐禅となり、水戸までの運転の疲れ？

昼食後の体調が重なり、十数分後には思わず睡魔に襲われ、警策を一発頂くことになりました。合掌！そしてその後短時間の合同作務。

合同坐禅会終了後、お茶を頂きながらの意見交換会、合同撮影会を経て、午後四時半頃、祇園寺ご住職、坐禅会の皆様に見送られ、祇園寺を後にしました。

新しく改装された祇園寺は、室内は明るく綺麗で、三百五十年の伝統ある風格を兼ね備えて、大都市水戸の中で曹洞宗の名刹として存在していることを実感しました。

そして一方では、六百年の歴史を有し、室町時代の様式を感じさせる総茅葺屋根の大雄寺、黒羽城に移築されて四百年という杉木立に囲まれた石段から総門、庭園、本堂、庫裡、回廊、禅堂等に続く歴史の重みは、単なる古刹とはいひ難く、改めて大雄寺の良さを再認識した研修旅行でした。

和みの香り、刻を遊ぶ

目面 靖浩

坐禅を組んで、香りを楽しむ。この日の大雄寺では、日常の時間では決して味わうことの出来ない上質な時間を過ごすことができた。

以前、坐禅が終わった後の茶話会の席で、雄禪会の一人が古心流香道をしなむという話をして、それでは是非香席を開いてもらうことになった。坐禅が終わり、一息ついたところで、本堂横の客間で、香元が香席の準備を始める。準備が終わり次第、住職以下の十三名の参加者で香席に着く。お寺の客間にしつらえた香席には、香道道具が並べられている。香道具が客席の前に並べられ、香元から香席の始まりの挨拶を頂く。

ご住職以下今回の参加者は香席が初めてという人ばかりであったため、本來なら沈黙の中で進められる香席だが、香道具の説明、香炉の説明、香席の進め方の説明を行ってくれた。

今回の香席では古心流十炷香の組香ということで、十種類の香を炷き、それを当てるという初心者にはたいへんに難度の高い香席であった。まずは、香元から試香を回され、香炉を左手に支え右手を丸く覆いながら香を聞く姿勢を教えてもらう。全員が回された試香の香りが微妙に違うだけで香りを覚えられない。香りを覚えることがこれほど困難なことなのかと知る。続い種類の香りと別の香りを混ぜた順番で香炉が回される。それを名乗り紙にど

の香りであったかを書いていく。次々に回ってくる香炉から立つ香りを聞いていると時の過ぎる感覚が緩やかになります、坐禅を組んでいる感覚に近くなる。まさに刻を遊んでいる心持になり、お寺の客室に立ち込める香りと、春の鳥の声、窓から見える新緑の木々で日常の喧噪を遥かに離れた幽玄の時の中にいることを実感する。香炉を十回聞き、名乗紙に答えを書いていく。これが当たる当たりないということはたいしたことなく、この刻の流れを楽しむことが香道なのだなとしみじみ感じた。

A　名乗紙が集められ、執筆者の元に集まる。そこでなく、この刻の流れを楽しむことが香道なのだなとしみじみ感じた。最後に参加者から一人づつ香道の感想を述べ、香席がお開きとなつた。刻の流れを香りに捉えて遊ぶ、禅に繋がるいい時間を過ごせた一日であった。

書筆が終わり香席全員の答えが書かれた紙を回される。微かな香りの違いを少しは聞き分けられたのか三炉程、当たっていた。

最後に参加者から一人づつ香道の感想を述べ、香席がお開きとなつた。刻の流れを香りに捉えて遊ぶ、禅に繋がるいい時間を過ごせた一日であった。

は南面です)

この向きは仏壇に直射日光があたらず、風通しもよいので、家のなかで最適な仏壇の安置場所になります。

② 本山中心説

仏壇の前に座って礼拝するとき、拝

む延長線上に宗派の總本山がある方向に安置します。本山によって、住む場所によって、西向きにも東向きにも南

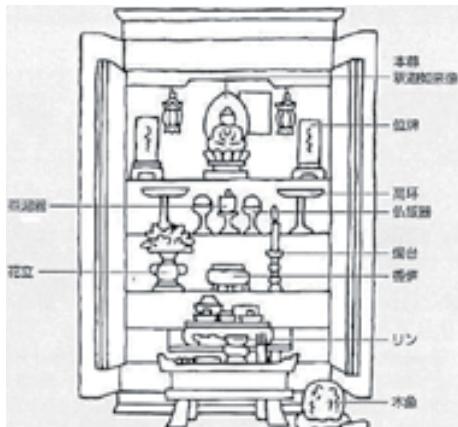
③ 西方淨土説

西方淨土とは極樂淨土のことと、西

方淨土の方向にある西に向かって拝め

るように、仏壇を東向きに安置します。

部屋の間取りから仏壇はどの方向に安置してもよろしいでしょう。



仏壇のまつり方 (曹洞宗)

A　仏壇にお水やお茶などを供水することは、仏さまへの感謝と敬いの心を表わす行為です。人として得難い命をいただき、毎日生かされていることに気づかれていたく、大切な今を生かしていることを喜び、仏さまに手を合わせることであります。

お唱えは、宗派によつて違いますが、曹洞宗は南無釈迦牟尼佛とお唱えします。

子供の頃、学校から成績表や卒業証書をもらうと、まずお仏壇にお供えをさせられました。成績表を仏壇に供えるというのは、どうか成績がよくなりますようにと仏さまにお願いするためではないことは、親から教えられていましたように思います。成績が悪いならば自分が努力するほかはありません。成績表や卒業証書を仏壇にお供えするといふのは、学校からもらえるまでに大きく成長したこと、生かされてきたことを感謝する意味があるのでないかと思います。成績表や卒業証書は自分の努力で得られたものですが、そこにはさまざまご縁の支えがあったからこそであります。

Q　毎朝、仏壇にお水やお茶をあげています。何の意味があるのでしょうか。また、お水やお茶をあげた後、手を合間がよろしいでしょ。

① 南面北座説

昔から仏壇の向きには諸説あります。昔から仏壇を南に向け、北を背にして仏壇を安置する考え方です。(お寺の本堂

方どの方角にも仏はいるとされているので、方角に吉凶はないのですが、一般的には北向きは避けて置きます。

Q　家族が毎日おまいりしやすい場所が一番適しています。座敷があれば、座敷が最適ですが、家族が集まりやすい居間がよろしいでしょ。

仏壇のことを考えますと、直射日光が当たらない、湿気の少ないところで、冷暖房の風が直接あたらない場所がよ

同じような疑問を曹洞宗の大本山「總持寺」を開かれた瑩山禪師に質問した人がおります。その方は、後醍醐天皇です。後醍醐天皇は、深く仏法に帰依した方で、瑩山禪師に十ヶ条の質問をされた中の一つがこれと同じです。

「人は亡き父母のために靈膳やお茶などを供えるが、少しも減っていない。それでも供養になるのか」という質問です。

瑩山禪師の答えは、「梅の花は壁を隔ても香りがしますが、梅の花の蕊（すい）は少しも傷んでいませんし、私たちの鼻にもなんの痕跡も残りません。心が通じるという事は、まさにこのようなことです。供養とは、目に見える変化の現われを期待するものではなく、雨露が、自然と草木を潤して育てるように、無心におこなわれるのが本当の姿です。まごころがあれば必ずご先祖に通じるのです」と、お答えられました。

目には見えなくとも、食べてもらえると信ずる心、この行いは、ご先祖に通じるのです。私たちもいつかは死を迎える、愛する妻や夫、子供たちとも別れていかなければなりません。父母に、ご先祖に、香り高いお茶や温かいお膳を供えずにはいられない。そんな心を持った、温かい家庭を育てていこうではありませんか。

Q 家を新築しました。「神棚」は作つたのですが、「仏壇」も備えたほうがいいでしょうか?

A 日本の宗教風土は、仏と神が混然一体となつた歴史があり、遠いご先祖様を神様とあがめ、近いご先祖様を仏様と尊んできました。

古来より日本の家庭では、ご先祖様

を仏壇にお祀りし、総鎮守である伊勢の天照大神、氏神様、その家に係わる神様を神棚におまつりしてきました。

家族の安泰や幸せを願い、大自然の恵みや家族の絆を大切にして、報恩感謝の日暮をおくっています。

お仏壇は、亡き人やご先祖を供養するところであり、ご本尊をおまつりして仏教の教えに触れるところであります。

もともと、人が亡くなつたから必要というものではなく、祈りの象徴であり精神的なよりどころであり、仏さまやご先祖のご加護によつて生かされている喜びを味わう場所でもあります。

次男や三男の家庭では、「実家に仏壇があるので」とか「家族に亡くなつた人がいないから」といった理由で、お仏壇は必要ないと考えている人が多いと思いますが・・・

自分が長男であつても、次男であつても、ご先祖を供養することは大切なことであり、まして自分の親が亡くなつたような場合には、家庭にお仏壇を置きたいものです。

自分が今こうして生きているのは、ご先祖様や両親のおかげであるわけですから、自分自身で仏様やご先祖様を大切にしていかなくてはなりません。父親や母親が家庭で毎日お仏壇おまいりをしていれば、子供たちにも自然と仏様やご先祖様への敬いの心が生まれるのではないか?

れて、感謝する心や思いやりの心が育くされます。

Q 納棺をするとき、お酒、豆腐、鰯節を使うのが恒例ですが、それぞれの使う意味と納棺の前と後にするところがありますが、どちらが望ましいですか?

A 葬式とは死者を葬る儀式で、死の直後における儀式として湯灌、納棺、通夜、葬儀、告別式などの儀礼があります。

古代信仰の因習からそれ地方により差異があります。

お酒、塩、豆腐は、身を清める儀式として使用すると考えられています。

塩を清めに用いることは、伝統的な習俗の中に多くの事例があります。例え

ば葬儀の際、会葬者に配られる清めの塩、大相撲で力士が土俵上でまく塩、料理店などの店先に盛られる盛り塩など清めの意味があるとされています。

大相撲で土俵に塩をまくことは、地中の邪気を払い土俵を清める意味と、力士が怪我をしないことを祈り、擦り傷などの殺菌効果もかねていると聽いたことがあります。

豆腐についても豆腐の白さから、身を清めるともいわれます。豆腐に醤油をかけて冷奴として食べるよう食べ方をしない、鰯節を豆腐に載せて醤油をかけないなど、日常的行いと違った行き(逆の行為)をすることと同じ意味があるのではないでしょうか。(逆さ

屏風・逆さ着物・逆さ水など)
「死」が非日常的な出来事であることを表わしているのです。(例えば、熱い湯を適温にするには、湯に水を入れてぬるくしますが、湯灌に用いる湯は、それとは逆に、水を入れた器にお湯を入れて適温にする方法を逆さ水といい、日常とは逆の行為です。)

「人の死」は、身内や親しかった人にとつては非常な悲しみであり、心痛に耐えない出来事です。そこで、自己の暗い心を拭いて、清らかな明るい心に立ち返ること。清めの意味は、死者に対するものというより、むしろ自らの心に対するものであります。

納棺の前か、後とかは決まりはないと思います。

Q 人が亡くなると枕飯や枕団子などを供え「枕飾り」をしますが、どのような意味があるのでですか?

A お釈迦さまは、お悟りを得られてからも一ヶ所にとどまることなく八十歳で入滅(亡くなること)されるまで説法の旅を続けておられました。

仏教における臨終や葬儀のしきたりは、お釈迦さまの入滅の際に所以するものが多くあります。例えば、北枕、末期の水、枕団子などがそうです。

枕団子は、お釈迦さまがお腹を痛め沙羅双樹の木の下で休まれたので、お弟子たちが消化の良い食べ物として小さく丸め食べ易くして枕元に供えま

したが、衰弱のあまり口にすることができなく、枕元に置かれたため枕団子といわれています。

枕飾りは、亡くなつた人の枕元に白い布を掛けた小さな机を置き、燭台（ローソク立て）、香炉、花瓶、鉢（リン）を置きます。線香を一本立て、灯明を供え、花瓶には花を一輪立てます。枕飯や枕団子、お水も供えます。

枕飯は、一杯飯ともいい、亡くなつた人が生前使用していた茶碗にご飯を山盛りにして、使用していたお箸を真ん中に立てます。お箸を立てるることは、この飯は亡くなつた人のものだという印とされ、善光寺参りの弁当という信仰があります。

枕飾りは、枕元に故人を釈迦さまの弟子としてお送りする心構えを示すためであります。

Q 戒名について教えて下さい。誰が付けるのですか？

A 戒名（かいみょう）とは、もともとは、仏教を学ぶために出家して、師の僧から授けられ（授戒という）、この時に与えられる名前のことです。生前において出家修行者、ないし在俗の篤信者がその「授戒」を経て与えられるもので、いわば「クリスチャン・ネーム」（キリスト教）に対応する「ブッディスト・ネーム」（仏教徒）といつてよいでしょう。

戒は仏教徒としての個人としての生

活のきまりのことと、例えば、五戒とか十戒とか、十六条戒（三帰戒／さんきかい）、三聚淨戒（さんじゅうけい）、十重禁戒（じゅうじゅうきんかい）とか、いろいろの条目があります。戒に沿った生活を実行するわけです。

この戒を守るかどうかを師の僧から確認が求められます。守ると誓った時、戒が授けられます。そして、新しい宗教生活が始まるのです。戒を守り、生活を調べ、世のため人のためにつとめていくのが仏教徒たるゆえんであります。

ふつう戒名といえば、亡くなつた時にお寺のお坊さんから付けてもらう新しい名前のことです。この時は、戒名を受ける人はすでに亡くなつているのですが、生前に戒を受けていないので、生きている人として遇し、授戒の儀礼を執り行います。そこで、戒を受け、仏弟子であることを証明する血脉（けちみやく）を与え、戒名を付けてから葬儀に移ることになるのです。

Q 送り盆で昔はお供え物を川に流してでしたが、今は環境問題等で行つていません。それに変わるやり方はないでしょうか？

A 孟蘭盆会（うらんぺんえ）のことを、略してお盆と言います。

十三日を迎える、十六日を送り盆といい、十三日から十六日までの四日間がお盆の期間となります。

お盆の準備としては、お墓の掃除と仏壇の外に精霊棚をつくることです。最近では、簡略化されて精霊棚を設け

ず、仏壇をきれいに掃除してお飾りをするというのが多いようです。しかし、新盆の場合には精霊棚を設けるようになります。

精霊棚は、小机などに白い布（正式には真菰／まこも）をかけ、中央に先祖の位牌とお花や供物、香炉、灯明を供えます。その他にキュウリやナスで作った牛／ナス／と馬／キュウリ／を供えます。これは、先祖の靈は、牛や馬の背に乗ってきて、また帰っていくという言い伝えによります。

この精霊棚は、先祖や故人の靈をお迎えする場所となるわけです。

お盆の期間に菩提寺の僧侶を迎えて精霊棚の前でお経を唱えていただくことを棚経（たなぎょう）と言います。

十六日の送り盆には、先祖や故人の靈を送る意味で、精霊棚の供え物を真菰（まこも）で包んで舟の形にして送り盆にお墓参りをします。このときの「供え物」を川に流すこととしたのですが、川へ流すと、川や海が汚れるということをやめているわけです。靈を送る意味で菩提寺やお墓へお参りする際に納める事が望ましいのです。

あるお寺様では「お供え物のナスやキュウリは、お札などと違って魂が入っていない。生ごみとして処分して太丈夫」と話されてもいます。

Q どうして僧侶の方は、髪の毛を剃っているのですか。坊主頭にしていない方もいますが、何が違うのですか？

A 髮の毛を剃つてつるつるの坊主頭ですと一目で坊さんとすぐ分かりますね。裸になつて温泉に入つてもわかれますね。

僧侶（坊さん）であることを自ら自覚することあります。髪を剃ることで僧侶としての生き方を実行しつづけることができるのではないかでしょうか。

なぜ髪の毛を剃るのかといいますと、煩惱を断ち切ることを「頭を剃ること」で毎日実行することであり、精神活動を自で見えるようにすることあります。

佛教、特に禪の教えでは、形を大切にします。「形は心をつくる」とい

ます。

福沢諭吉は「人心の非を正すは難しくして、形を改むるは易し」と教えています。

「心を正すことは難しい、形を改めることからだ。」つまり、形から入るのが易しいと教えています。

「はきものをそろえること」

はきものをそろえると心がそろう心がそろうとはきものもそろうぬぐときにそろえておくと誰かが乱しておいたらだまつてそろえてあげよう

そうすればきっと世界中の人の心もそろうでしょう

1 自分のはきものをそろえられない

人は、他の人のはきものをそろえてあげることはできないものです。

他の人のはきものをそろえてあげられるような自分になるためには、自分で自分のはきものをそろえることを実行することができます。他の人のはきものをそろえてあげられる心と行いができれば、思

やりの心が育ちます。

「形は心をつくり、心は形となる」ということです。

坊主頭にしていない方もいますが、何が違うのですか？この質問では、仏教の宗派によって髪を剃らない宗派もありますし、お坊さんの考え方の違いもあるでしょう。

月之致幽於此際、鍾乾坤之秀氣於斯亭。師蓋賦之以詩乎。予曰、嗚呼美平哉。此亭之壯觀也。居、予語公了。知諸法所生、唯心所現、則心之外無境、境之外無心。是故心生則當處出生、心滅則隨處沒滅。以道眼觀之、則五嶽七澤、即胸中之吞吐、十洲三島、即心内之常分而已。經不

失於本心、爲物所轉。故於是中一觀大觀小。若能轉物、則同如毛端、徧能含受十方國土。公如說、若能轉物、則見色即是、聞聲即是、乃至一切事中、無有不是。否則反焉。豈取局量勝境、捨最大妙心哉。

公曰、師說此理也。不所企及。姑依俗諦門。隨吾所好、予不獲辭。於是拈其大者十二景命題。厥中四首者、武江道人絕唱也。厥中八首者、予拙吟也。未免取笑於大方之家、詩逐一錄于左。

元禄十二歲次己卯中秋八月穀旦
前住大雄廓門徹序

那珂湛月

萬畝如雲還似浪、
晚禾早稻發馨香。

羽嶽廓門

昧爽推門坐草堂、
更期曝背負朝陽。

天開五色文章印、
印破虛空萬丈光。

武江道人

向陽初旭

昧爽推門坐草堂、
更期曝背負朝陽。

天開五色文章印、
印破虛空萬丈光。

前田阡陌

萬畝如雲還似浪、
晚禾早稻發馨香。

農夫扶野有年瑞

解帶官家食太倉。

水自流兮魚自鈍。
桂華落水蘸雲霄。
試觀水面風波惡、
中有明珠湛不搖。

武江道人

那珂湛月

雞犬近聞民屋幽。
炊煙香氣已浮浮。

太平有象兼人物。

動植生兮百不憂。

羽嶽廓門

八鹽萬竈

山抽台宕翠崢嶸、
膚寸逐風軟脚輕。

舒卷無心存妙用、
溥沾甘雨起蒼生。

武江道人

今から約三百年前、黒羽藩の重臣風野勝長は、日当たりの良い四方望めるところに向陽亭という庵を建てた。風野勝長は、大雄寺住職十三代廓門貫徹和尚と江戸から訪れている蘭山道祖を招いて、向陽亭から望む素晴らしい景色から十二個の漢詩を詠んでいたくよう依頼した。二人の禅僧が詠んだ漢詩「向陽亭十二景詩并序」がこの度大雄寺で発見され解説が進められた。

栃木県立黒羽高等学校開放講座「ア



平成19年10月13日(土)
初めて公開された「向陽亭十二景詩并序」を熱心に見る参加者たち

「向陽亭十二景詩并序」を読む

カデミアとちぎ」の教材として、地元出身の郷土史家で黒羽高等学校教諭の大沼美雄氏が「元禄期の黒羽文化——漢文資料を読む——」を題して講義された。

大沼美雄氏が作成した資料から全文を紹介する。(序及び詩は、大沼氏による句読点・返り点を付けて掲載する)向陽亭十二景詩并序

風野勝長公、向東南、構華亭、

名之、曰向陽亭。一日令予遊于

冬日宜於曝背、月湧河流。

秋宵宜於照心。築波藍秀。

夏天宜於盪胸。宕嶽岫雲。

鳥山瞻眺。逸興遄飛入于座。

日光霽雪・那須沃野。爽氣儼然侍于傍。其餘前田阡陌也。八

鹽萬竈也。煙寺晚鐘也。河流長橋也。四時景趣、萬象變態、不招而臻、不促而來。接風



向陽亭十二景詩并序
(大雄寺蔵)

岩嶽岫雲

山抽台宕翠崢嶸、
膚寸逐風軟脚輕。

舒卷無心存妙用、
溥沾甘雨起蒼生。

武江道人

珂水長橋

一水曳情鴨綠頭、
紫虹橫臥吸川時。

功名入手誰題柱、
萬里之行始自茲。

羽嶽廊門

那須沃野

莽蒼野遠不遮欄。
鳥兔垂光做指南。

好用蒙莊稱廣莫、
呼爲圓覺活伽藍。

武江道祖

人和地利得其所、
鳥尾畢逋收即座。

森列群峰無處藏、
豁然眼界不遮邇。

馬場櫻桃

駿々逼人汗血種、
春風得意帶香馳。

萬條花與篩雲駿、
逸氣芳姿雨絕奇。

羽嶽廊門

上方禪刹淡雲裏
大吼鯨音徹羽城

薄暮高樓聲且亮
不占正是定天晴

武江道祖

退隱廊門書於三點菴中
一、風野勝長

風野家三代風野五丘衛勝長、黑羽

藩家老。延享二年（一七四五）一二

月九日没。（十二景詩作成から四十

六年後に没）

元禄十二年（一六九九頃）の風野

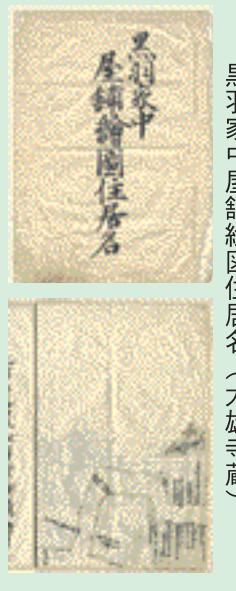
家屋敷は、現在の黒羽小学校の隣、

招魂社前、資料の「黒羽家中屋舗絵

図住居名」から考えられる。

羽嶽廊門

黒羽家中屋舗絵図住居名（大雄寺蔵）



（注二）東臯心越について
元禄八年九月三十日示寂 五十七歳、

水戸祇園寺開山

中国浙江省金華府浦江県に生まれ

た。三十二歳（康熙九年）杭州西湖の永福寺に入る。十七世紀半ばの中国は、明朝が滅び清朝に替わる際の混亂期、いわゆる明末清初の動乱の最中、中国

元禄元年（一六八八）には、黒羽

藩主第二十一代大閑増榮の死去により導師を務める。

元禄六年（一六九三）水戸祇園寺開山東臯心越（元禄五年十月六日十五歳の時祝国開堂）が大雄寺を訪

日光霽雪

勝道開山度幾春。

皚皚峰頂得其人。

白花粧點洛伽境
觀面水肌淨法身。

羽嶽廊門

煙寺晚鐘

上方禪刹淡雲裏
大吼鯨音徹羽城

薄暮高樓聲且亮
不占正是定天晴

羽嶽廊門

退隱廊門書於三點菴中

この「向陽亭十二景詩并序」に登場する風野勝長、廊門貫徹、蘭山道祖について紹介する。

一、風野勝長

風野家三代風野五丘衛勝長、黒羽藩家老。延享二年（一七四五）一二月九日没。（十二景詩作成から四十

六年後に没）

元禄十二年（一六九九頃）の風野

家屋敷は、現在の黒羽小学校の隣、

招魂社前、資料の「黒羽家中屋舗絵

図住居名」から考えられる。

羽嶽廊門

二、廓門貫徹（大雄寺十三代住持）
(一) (一七三〇)

享保十五年一月二十七日示寂

曹洞宗の学僧であり、漢籍や中国の禅録に通じた碩学であった。廊門、

屋愚子と号す。若き日心老人に師侍し独庵玄光にも親しくて学問を学ぶ。

黒羽山大雄寺十二代の幽峰玄玄大和尚に嗣法し、元禄元年大雄寺十三代住職となる。

大雄寺では月光庵を開き、一切經を寄進している。（この一切經は、中国明、清時代の經山寺版で木版四千五百巻を經蔵内の輪藏に収藏している。）

長崎天祐寺で「夾註輔教編」を講じ、これを基にその臻註本をまとめ、貞享三年（一六八六）に刊行。やがて大雄寺を退き（元禄九年一六九六）、正法寺（旧黒羽町大豆田）に入り。宝永七年（一七二〇）に「註石門文字禪」を完成し刊行する。さらに享保十四年（一七二九）独庵玄光の「護法集」十六巻に詳註を施した「護法集碎金」十四巻を刊行する。翌年享保十五年（一七三〇）一月二十七日示寂。

石門文字禪

輔教編



廓門和尚木像

れる。（注一）

人僧侶らが多数日本へ来航している。大半は、黄檗宗に属し、隱元は京都万福寺を開き有名である。

長崎の興福寺住職澄一禅師の招きで、延宝五年（一六七七）三十八歳で来訪し、日本に近世篆刻や七弦琴などを伝えた。元禄元年（一六八八）心越五十歳、水戸で光圀に会い「涅槃図」を書き親交を深めた。元禄五年（一六九二）水戸祇園寺を開山。

元禄六年（一六九三）七月心越五十五歳、那須温泉に来る。那須温泉から帰りに黒羽に立ち寄り、黒羽山大雄寺に訪れる。この時代の黒羽は、この地方の物資の集散地で、米や材木などが那珂川を下って江戸へ運ばれていた。市街は那珂川を挟んで、東岸が黒羽藩大関氏一万八千石の城下町で、西岸は河岸問屋が軒を並べていた。

心越禪師は、大雄寺から八塙の心月山長渓寺を訪れ、長渓寺十景詩を詠み、また、烏山を訪れ烏山南台山天性寺で南台八景を詠む。《黒羽には元禄二年四月、松尾芭蕉がみちのくへの途中を十四日間ほど滞在したが、心越禪師が訪れる四年前のこと。》

心月山長渓寺十景

日光晴嵐　野村夕照　西山暮雪
遠寺晚鐘　羽邑櫻花　鼓島松風
豆田落雁　中河帰帆　竹林夜雨
長渓秋月

八塙長渓寺で詠んだ十景詩を紹介する。

烏山天性寺で詠んだ八景詩を紹介する。

三、蘭山道祖（一六四九～一七四二）
宝永六年一月十九日示寂九十四歳
加賀国金沢の人、寛文十二年（一六三二）頃から江戸に滞在していた、元禄十二年（一六九九）蘭山五十歳のとき、大雄寺前住職廓門貫徹と向陽亭十二景詩を詠む。

元禄十四年（一七〇二）水戸天徳寺（祇園寺）三代住職になる。太湖蘭山祖禪師和三籟集三巻を宝永四年（一七〇七）に刊行、大智禪師偈頌和韻三巻を刊行する。



太湖蘭山祖禪師
和三籟集
(大雄寺藏)



南台八景

烏山晴嵐　宮原夕照　南台暮雪
隣寺晚鐘　戦場落雁　那珂帰帆
桜井夜雨　東嶺秋月



靈鷲　学無為

元禄六年（一六九三）七月心越五十五歳の時、那須温泉から帰りに、黒羽山大雄寺に訪れたとき心越が書き残した篆刻書が保存されている。総門に掲げる「靈鷲（りょうじゅう）」と禅堂に掲げる「學無為（がくむい）」である。

那珂橋今昔



昭和8年8月15日渡り初め式
(大雄寺蔵・寄進者 西山敏子氏)

現在の鉄の橋になるまでには先人の英知が集められてきました。黒羽藩お抱え絵師小泉斐作で市所有の「黒羽城鳥瞰図」（大田原市文化財指定）は、天保八年（一八三七年）に描かれたものですが、那珂川に架かる橋は「船橋」を見ることができます。

資料によりますと、天保七年（一八三六年）頃、近江国日野町生れの商人釜屋久兵衛という人が試作したのがその始まりです。大雄寺所蔵の大田原市文化財指定の「黒羽城郭図」は、年代不明ですが、那珂川には

「船橋」が描かれていない点から推測すると天保七年（一八三六年）以前のものと思われます。

「船橋」を那珂川に架けた金屋久兵衛は後に『船橋』という苗字を大関氏から与えられました。現在子孫は那須塙原市在住です。

「船橋」は、明治八年（一八七五年）まで船橋氏が経営していた。「船橋」が廃止され木橋になつたのは明治三二年（一八九九年）十二月からで、この橋を「常橋」と称し、その後明治四一年（一九〇八年）に新しい木橋に架けられました。昭和八年（一九三三年）現在の鉄橋になりました。

この現在の鉄橋も七十五年も経つていることになります。

黒羽藩の交通機関は那珂川で船が輸送手段で物資木材が江戸へと往来していました

が、道路を走る自動車・トラックが輸送手段となつた今、那珂橋の老朽化による危険度が増し、早急な方策を講じなければならぬ。



黒羽城郭図

** 「下野新聞 平成19年5月21日付より転載」 **

大田原 ぼたんの花に和の音色 大雄寺で尺八、箏演奏会



大雄寺の本堂で開かれたで尺八や箏などの演奏会

【大田原】黒羽田町の大雄寺（倉澤良裕住職）

でこのほど、恒例の定期演奏会が開かれ、尺八や箏などの莊厳な調べが本堂に響き渡った。

同寺は毎年、ボタンが満開になる時期に合わせて本堂を会場にコンサートを実施している。

八回目の今回は、尺八奏者の田辺頌山（しょうざん）さんと箏奏者の鈴木恭子さんら五人が出演した。

この日は二部形式で開

催され、第一部は約百人を前に田辺さんが山本邦山作曲の「甲乙」を披露したほか、尺八と箏、弦の競演で「さくらさくら」など三曲で構成されるメドレー曲などを演奏した。

来場者は演奏に静かに聞き入り、日本の伝統的な音楽を楽しんだ。宇都宮市関堀町の片山欽一さんは「尺八や箏の音色が本堂の雰囲気に合っていて、すごくよかったです」と話した。

** 「下野新聞 平成19年5月8日付より転載」 **

大田原 大雄寺で13日演奏会

【大田原】黒羽田町の大雄寺（倉澤良裕住職）は十三日、境内のボタン約三百本が満開になる時期に合わせ、第八回定期演奏会を開催する。今回は日本の伝統音楽を楽しんでもらおうと、尺八や箏などを奏でる。

演奏会は、本堂を会場に一流奏者を招いて毎年この曲「日本のメロディー」など五曲を披露する。

田辺さんは岡山市出身。小学生の時から父恵山さんは二千五百円。各部とも先着百人。問い合わせは同寺 ☎ 0287・540332へ。

伝統音楽 ボタンと共演

人の手ほどきを受け、早稲田大学後の人間国宝の山本邦山さんに師事。ローマ法王・故ヨハネ・パウロ二世の前や米・カーネギーホールで演奏するなど国内外で活躍している。

倉澤住職は「静寂の癒やし空間の中で伝統音楽の美しい音色を聴き、一時のやすらぎを感じてもらえた」と話している。

当日は第一部が午後一時から二時十五分までで、第二部が同三時から同四時十五分まで。入場料

は二千五百円。各部とも先着百人。

静寂の中、尺八や箏

小学生の時から父恵山さんは二千五百円。各部とも先着百人。

問い合わせは同寺 ☎ 0287・540332へ。

大田原・大雄寺所蔵の「向陽亭十二景詩并序」

初公開される「向陽亭十二景詩并序」と大沼美雄教諭（右）、
倉澤良裕大雄寺住職



黒羽高教諭の大沼さん



【大田原】江戸時代の元禄期に、黒羽藩の重臣が大雄寺の住職らに作らせた黒羽地方の十二景を紹介する漢詩が、同寺に保管されていることが分かった。黒羽高教諭で郷土史家の大沼美雄さんが解説して明らかになった。黒羽を訪れた十年後。今まで一般に存在は知られておらず、大沼教諭は「当時は俳句ばかりではなく、漢文の文化も盛んだったことが分かる貴重な史料」と話している。

元禄期、藩重臣が作成 6日から開放講座で公開

文書は六日から開講する黒羽高の会報講座「アカデミアとちぎ」で一般に初公開される予定。解説されたのは、黒羽藩の家老も務めた風野勝長が選定した「向陽亭十二景詩并序（きょうようじゆ）といじゅうにけいしならびにじょ）」。

風野は元禄十二（一六九九）年に、現在の黒羽小南隣の高台にある自宅敷地内に向陽亭を建てた。東南に開け、眺望が良かつたことから、十二景を選定。「前田の阡陌（せんばく）」「珂水の長橋」など黒羽地区をはじめ烏山や日光、筑波山の眺めにまで及んでいる。

十二景を詠んだ漢詩を大雄寺十三代住職の鈴門貫徹（かくもん・かんてつ）に八編、水戸藩で徳川光圀に仕えた僧、嵐山道祐（らんざん・どうぢょう）に四編作らせた。貫

徹は序文も書いた。

道祐は中国の明から日本に渡ってきていた黄檗宗の僧・南源性派の教えを受けしており、明代に収えた「八景」を選定する

文化の影響を受けていた。

大沼教諭は「当時の明の文化が関東の隅の黒羽まで及んでいたことが分か

ると分析している。

「向陽亭十二景詩并序」は大雄寺に収藏されているが、内容やいわれは伝わっておらず、倉澤良裕

住職が大沼教諭に解説を依頼した。

アカデミアとちぎは、六日から二十七日までの毎週土曜日の四回開講。

大沼教諭が講師を務める。受講者を募集中で、希望者は二日までに黒羽高へ申し込む。受講は無料。

申し込み、問い合わせは同校（担当・津久井さん）

0287・5401

1月1日より 初詣
2月3日 節分会
3月5日 白旗不動尊大祭
3月17日～23日 春彼岸会
5月1日より 牡丹開花
5月8日 花まつり
5月11日 牡丹コンサート開催
6月8日 大般若法会
8月13日～16日 盂蘭盆会
9月10日～26日 秋彼岸会
10月1日 大施食会
11月18日 觀音祈願法会
12月31日 除夜法会
毎月第一と第四日曜日
午前七時三十分より 坐禅会
毎月第一火曜日午後一時三十
分より 写経の会
毎月第二と第四水曜日
随时拝観、法話、坐禅研修会
を開催しております。

平成二十年の行事

大雄寺ホームページ 詳細説明、一口法話、お知らせページ、掲示板など掲載

URL:<http://www.daiouji.or.jp/> E-mail:ryoyu@daiouji.or.jp